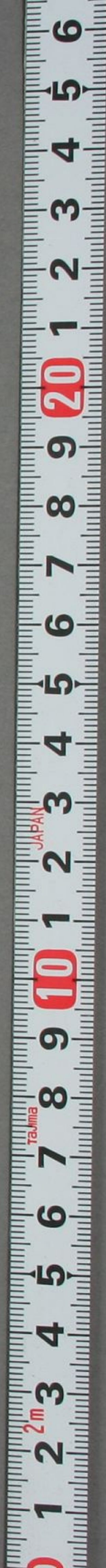




只折集

震

特別
5
1802



獨吟

井川氏
忠勝

橋より春をたふ傘も月面
天は好風ちやまおとま
奇蹟ちる硯も筆と取活して
柔と乞ふもしよ出はさうつと
る明や瑞香の具れ後しよ
折うらわさふ鳥目さぬし

笈士たふさうく肌をうて
むくも向さぬ心れ目つら
かこせに猿乃子もなすし
は梅うらよさめは破麩ら
土のろと用として移す草ら
色いりし付けぬ酒の袖ら
月れは毫もいら女つとら
頭ゆらうらこのむ辞を深

つもこそ化して跡も異さる浮世系
春一ささるふれ懐くもこゆく
かゝいぬら花見の幕もあはして
は芥、流して包む鼻後

有明は眠る兒を流標り
叔故乃にれおゆさ暮^ゴ床^{モドリ} 夢
物ももころめぬ夏女瘦せ
月をよふる軒のゑさる
美^{ツロ}髪^{かみ}は銀目くくと^{ツギキ}諾^{ツギ}ぬ 全
髪^{かみ}結^{むす}ひ来^きまはれおむらうか
虚^{ウソ}言^{ことば}と^とはく^くは^は小^こ鼻^{はな}は^はら^らと^と 全

只元

まてうららけい乃たまさ
五いとれねふまのれ荷ひあ
谷つぬ時宮沢系新聖具
照りもせひそして星らぬあ
乳多くさんりまらさひ子や
茶柄抄乃あうけらう下么
燕乃うき若ハ温うりゆー
位出に我声多とえーぬろ

丸 全 丸 全 丸 全 丸 全 丸

笠よ書と何れ有あ水
手とりて花乃藝と何又産
綿子乃裾とまんす何喜凡
薙れ所と扣つかゆ人の跡
竹冠とけええと何又子
石橋乃傾くかたは若じして
子よあましくけうえ政う母
美菜と嬉よ么のうしとされ

丸 全 丸 全 丸 全 丸 全 丸

母下

五

告とかり出次氏社のみや
子苗奇河を色と自ら世に半
あらほとゆてそそぬ素麵
灯火の如く消ん波風鳴
物乃氣ゆる心月れ入り方
穠れ風行れ棕櫚まうさうく
早猶菓焼てりくす足乃湯
日くよ来く西知人の能くき

全 文 全 文 全 文 全 文 全 文 全 文

果報ハやめくとうく世の中
酒呑んでさすりて唇力痛
清らん休へ植ふ木流ぬり
花の香やさそ来ろ一の香并
的^{アツチ}心と作子まゝな心晴

全 文 全 文 全 文 全 文 全 文

鈴本吟風

秋忘れ若きものうねく狭く敷を中
 じしし来き風や荒^{ハラ}々干らん
 競のを肩れ掃かぬ行^{カゴ}輿かりと
 物やかきもらん^カ土まこの花乃妻
 舟新ぬ熱くえんお打鳥帽子
 酸貝とぬるの秋乃淋しと
 夢^{ユメ}よれ家清くと世よぬきぬら

全
 吟風
 全
 吟風
 全
 吟風
 全
 吟風
 全
 吟風

炎揚^{ツゲ}流白木ら整よ地とこさ
 園よちかきりぬ洗と濁らぬ
 糊すりとけやきもも鳴なり
 世の中よ法師のふまも罷造り
 綿あやちれ忠度乃とて
 すうくと扇ら筆れ廻りよし
 ねるまう店よむらり照子月
 え鬼まつる心よ海の香^ニにくな

全
 吟風
 全
 吟風
 全
 吟風
 全
 吟風
 全
 吟風

わいて迹とてさる鴨モヨリ只丸

交是乃志は根葉よ咲とるしモヨリ全

ひ下りたりと是も痛よみモヨリ吟風

二人し寺院に唱ふ春ねるモヨリ全

うめかき後く心半とじりしモヨリ只丸

食物とせれし猫の腹とすりモヨリ全

兵庫よりりの出よあすはモヨリ吟風

風呂あはれさつらやう志音鏡モヨリ全

何と根とてしりあてこモヨリ只丸

石竹の乱あをれうらやモヨリ全

有髪乃僧よ杖とまりし坊モヨリ吟風

大年の暖磯師の書み記つ守モヨリ全

外又七のり志半一紙とるモヨリ只丸

常くも袴志てゆく菓子所モヨリ全

夢よ月見の書志押歌モヨリ吟風

洗濯の紙うりり肌 只丸
白き為す心と引す流星 全
居はるる觸く夜軍れ果 吟凡
懐るる一所の折枝の葉 全
三月を多そまを心あふ 只丸

河守 可也

菊拵ふ蔭よるや寝るる小心 伏
昼乃清あを春かせろ半 祐山
世に流しとて言ふ事さかお心て 只丸
底よ母屋乃あり跡さよ 五
筆凍る月よ朱回と傾け 心
流いそく多れくおぬ咳嗽 丸
夏氣よと鶉飯此味おほく 五

手楊と海そそ野砂のきつづと
信ふと野のまと楯乃と
雲ぬわのろと岨乃とむと山
おしきけ基よ酒よぬらまじ
ぬめと釘らうそぬぬぬ
そとやそ火神乃炭よ文とぬ
錦と一交り鳥ちくちり
孤^{ヲマ}母^モ抱^モ吸^モむと長とよ
丸 子 云 山 楊子

みららと申と一そは麻衣
月乃言候とそそ根と包と
はとめくして志とぬ出替り
物いまの三年に磨よ足^{ツラ}競へて
廻らると乃とととと系永
異ととと裸よとと風とと
い物とととはととと懐妊
頃^{コノコロ}そとととととと七面
丸 子 云 山

如浦乃ららよはくをまこ
望人ともふい乃後を力づき
降是は父也子子らも
照指とほき白紙拂ひ控
茶より代へてうまし一標
月をく系ら約度とする紙
毛いろくたん遠くぬエ語猶
書りぬ家のほころい家なる
云子丸云

我奇心とらう風を此内
八専ら明ても元れ書とら
乃よかりこく淋の再カイけ
いりくそま乃まを風後
その垣たうは永き日れ元
子丸云

独吟

小澤

我勇

橋立や園より月松此音
行入新くると休む帆の浪
と十日登り月のみあり
使試まゝぬ七夕も鞠
登一き遊事一古抄巻
金堀百部の心うらさ

岳嶺と来りてこそ今法師
朝麦飯より洞こりし
いよとてぬ登極の美を
札押時を小撰阿利
腮ホウ臺と伯父松のよき
耳ふえ中子白川のあ

下

上

獨吟

我眠

又よつこの胡蝶あまを此稜窓より
をせぬ庭よち中庭より茶
去風よりかきす海霧よそへ
基打れくは海おろしき
屋敷有邊にたれたれか月
かはるく息とちくや去虫

神前よ福をれよつは秋河
魂タスガ助タスガあも妹、わり挿
み波よをよとえら情めて
より行きらく高浦河背
浪紙乃葉由るよれ自ん
わいさののるさるし差を
鳴笛と初しうらまえては
涙水入る人物さの月

うそききと半のふ自由とやあひ
酒と音すは御カウキとせど
丸腸のかけと信よれ代の本
己うゆくりかけは燕の巣

沙門結心

夏山や花表むくのなかり
名と心重り鳴り蟬く
強くぬけはまの鞠カウキの鞭おとく
背カウキくはつは腸カウキえん柄カウキ
月の前葉しはつは詩うさ
蓮乃実をむしてはつかは理
放生舎無紙のりてあつは

冊下

七

有定 只凡 分定 拾安 筆 有

文と拾ふて海と雲のすら
かす凡唯者よちらし修らし
きの奇物さるんを中へ付
りてくさるのあま油をり
柔白まろくと除ふ咳嗽
何よりとちる物々伊呂波韻
託念^{カクシ}けを世の中れ杖
玉盤乃くかまなりて冷しや
拾

こころら紙をん若月の芽
きの流しそまを初の記事とく
葛乃柔りりんち白さく拭
糸中よの埃^{ホコリ}まうしあま小屋
中よま乳母よあすらしけ
金^{モラ}ねよまよち花らし
長色つさるのねさるさ
吹つちく割^ワ米温じつちそま
拾

花影月香入窓よこひ
祢して只丸書さじそ京の
物子一交丹後舞と云葉
を情あかちを折水の
維舟のよき寸かゝる花
を似寸自りちゝと見

母下

三

長久保 新

長久保 新

長久保 新

京寺町二条上几町

井筒屋本家板

